



いわいしま通信

第1回目の「祝島植物観察会」を開催しました

(財)日本離島センターの平成14年度離島人材育成基金助成事業にもなっている「祝島ガイド養成事業」の一環として、7月13日(土)に第1回目の「祝島植物観察会」を開催しました。参加者は、祝島ネット21の会員を中心に7名が集まりました。

講師には元柳井高校教諭で、現在、山口県植物学会会長の南敦先生をお招きし、三浦湾～北野～西のお墓あたりを巡り、アコウ、コッコウ、ケグワなど祝島に特有な植物を中心に、生態や学術的・



島の天然記念物のケグワの木の前で

歴史的価値などについて詳しく解説していただきました。

観察会の後、祝島公民館で南先生を囲んで、懇談会を開きました。懇談会では、「祝島名木百選」などを選定し、植物を島おこしに結びつけてはどうか、という話などが出ました。

第2回の植物観察会は、別の季節に別のルートで開催しようと思っています。今回、参加された方もできなかった方も、ぜひ次回ご参加ください。



アコウの木の解説をされる南先生

もうすぐ第2回祝島不老長寿マラソンです

8月11日(日)に開催する「第2回祝島不老長寿マラソン」まで、あと10日あまりとなりました。今年は宿泊施設が少なく、参加者は減るのではないかと考えていましたが、予想に反して昨年を上回る参加申し込みをいただきました。

5月から準備を進めてきましたが、これから大会当日までまだまだ準備が残っています。特に大会前日・当日は多くの人手を要しますので、可能な方は、ぜひボランティアとしてご参加下さい。ご連絡は大会実行委員の國弘か木村まで。



大会オリジナルTシャツは今年も村岡正司さんのデザインです。

目次

第1回目の「祝島植物観察会」を開催しました	1
もうすぐ「第2回祝島不老長寿マラソン」です	1
<連載> 祝島の歴史を探る	2
<連載> 魚・さかな・肴	3
会員リレーコラム	4
Let's Learn English in Iwajima!	5
お知らせ&募集	6

家人は帰り早来と祝島
齋待つらむ旅行くわれを
(万葉集より)

民俗学者の宮本常一氏と同じように祝島の堤のことを小説家の石牟礼道子さんが書いておられます。石牟礼さんといえば水俣。市内の一主婦にすぎなかった石牟礼さんは公害発生を機に小説家としての道を歩み始めました。祝島に原発の話が持ち上がるまでは水俣の人々が戦い続けることになった負の遺産を同様に自分達につきつけられるとは思いません、忘れた頃に放映される水俣闘争をただ対岸の火事のように見ていました。企業城下町として繁栄する水俣とその被害を受け続けた水俣市民の葛藤はそのまま原発問題と似たような側面を持っていて、水俣の問題は私にとって対岸の火事ではすまなくなりました。数年前TVのドキュメンタリーで磯崎新という世界的な建築家が、水俣に作るモニュメントの国際コンペの審査員長をした際、そこに建つものがはたして水俣の鎮魂歌となりうるか真剣に考える姿が放映されていました。磯崎氏と水俣の抗議運動に疑問を感じ、亡くなった人の為にただ仏像を彫り続けることで抗議する元過激派のリーダーとの対話は戦い続けることの難しさを充分伝えてくれ、反対運動のあり方を考えさせられました。その二人の思いに触発されて水俣に関する本を探しているとき20年前に出版された石牟礼さんの「常世の樹」(葦書房)という本を見つけました。

もともと新聞の連載記事が抜粋され一冊の本になったもので、「導きの桑」というタイトルで、石牟礼さんが島の天然記念物のケグワを見に来られた時の話が書かれています。案内は重村さんと橋部さんでケグワを見に行く途中に見た堤や石垣についてページの大部分が割かれており、石牟礼さんのこだわりが感じられます。



北野の堤は現在も貴重な水源池として使われている

「それはまことに感動的な手造りの貯水池だった。一段一段の田に行く綿密な放水口は、湖水の水位をそのまま示す仕掛けとなっていて、島のいただきに広大な大地から、天水は洩れなく集められているとのことだった。みすみす海に流れ落ちてしまう水を眺めていた長い歴史があって、北野共同組合五十戸と云われる水田開発者達が、約十年がかりで仕上げたというこの水は、大正五年、最初の田に給水されたと聞く。それまでこの島には稲は出来ず、麦作と唐芋を主食としたのであった。」

その感動とは、「天と海と地から来る叡知を身体に具現する人間達は、一見、文明から離れた場所に居るものだ。じつはそのような者たちこそ文化の最基層たる存在で、その総体を見れる者であり、伝統というものの実質なのである。二十年前に完成したこの事業は島民たちの人力のみで行われた。専門の石工でもない人びとが石を割り、細く、曲がりくねった道を運んで水を溜める土手を築きあげたという。技術というものは小手先のわざではなく、先人の精神世界を受け継いだとき初めて確実に伝承されるのである。国家的予算を投入して行われる大ダムを見たときよりも、この切実な貯水池に、私は人間の叡知の深さを見た。」

ダム建設を盾にもめている何処かの県知事や県会議員に国民のための公共事業とは何かを考え直してもらう為に聞かせてやりたいような話です。

しかし堤は漏水が進み数年前にコンクリートと防水材で改修されましたが、それでも漏水は止まりませんでした。建築現場でも土間のコンクリートを打設する前にランマーという機械でコンクリート下の割栗石を充填しますが、これをしっかり充填しないとコンクリートは沈下しひび割れてしまいます。堤を作るにあたり石垣を積み前に何十年も水が漏らないほど人間の手で土を締め固めたのでしょうか。その労力を考えるだけでも当時堤を築いた人々の並々ならぬ努力が容易に想像できます。石牟礼さんも、「じつは波止場の夕闇で見かけた民家の石壁や段々畑の石組みが、心にかかっていたのである。旅情をそそる石垣、というふうには私はとらえられない。百段畑を登り降りする労働の辛苦は、幼児体験を思い出すだけで充分すぎる。私どもの地方で"死んだものの足型は残らんが、手型は残る"という言い伝えがある。祖父母たちが余命幾ばくもないのに思い立って、孫子の為に植えてく

れた蜜柑や柿などを、じいさま、ばあさまの「手型の木」と云い、井戸や段々畑の石組みのことも、ご先祖さま方の手型と云うのである。この島にまみえた瞬間に私が覚えた寂寥と懐かしさは、手型の島という風を感じたからにちがいない。」と堤を築いた人達の苦勞に思いを馳せ、水俣を見つめ続けた石牟礼さんらしい深い愛情で島の堤や石垣を見ておられます。私達はその石垣や堤を築いた祖先の力によって存在することを感謝し、この堤や石垣のことを心のどこかに記憶しておきたいと思います。



イタリア山岳都市アッシジ
この風景どこかで見たこと
ありませんか？



祝島の段々。三藤商店の上あたり。

<連載> 魚・さかな・肴(2) ~クログチ~ 木村 力

私の同級生で、「クログチ」と言う名前を聞いて、懐かしさをおぼえる人がどれだけいるのでしょうか。10人くらいじゃないかと思います。4月の終わり頃から6月一杯まで、磯のウゴ釣りで良く釣れる魚です。

私の家は東方(ひがしがた)ですから釣り場は自然とナカバエからチョンギー(オキナ)にかけての磯でした。波打ち際の岩陰や石の間にひそんでいます。私は今も毎年一回以上息子と、このクログチのウゴ釣りに行っています。

メバルの仲間でしょうが、いかつい顔をしています。図鑑で調べると標準名は「ムラソイ」のようです。

少し磯臭いのですが、結構うまい魚です。子供の頃は、焼いて味噌に付けて食べるというのが普通でした。この頃は、クーラーに入れて持ち帰り、フライや刺身にしても食べてみますが、うまいです。



釣れた魚をこんな風にぶら下げて石や瀬の上を釣り歩いていた。

ちょっと面倒くさいけど、身を包丁でたたいて、ミンチにして塩をきかせて、シイなどのはっぱにはさんで七輪で焼いて、「ピールのつまみ」に、とやってみると、なかなかの味と気分です。[このやり方は「野外手帳」(白土三平著)という本に出ていました。]

クログチは夏になると全く釣れなくなります。肉食主義にでもなるのでしょうか。

形は全く同じで、「モゴチ」というのがいます。浅瀬の藻のあるところにおいて、クログチが陰の黒色ならこちらは藻の色に近い茶色主体です。



クログチ

会員リレーコラム(2) ~ 橋部 好明さん ~

このコーナーは「祝島ネット21」の会員の皆さんに、自己紹介を兼ねて簡単なコラムを書いていただくコーナーです。

第2回目は橋部好明さんの登場です。



橋部好明です。祝島在住60年。その私の人生にこの春大きな転機がありました。定年退職です。

この祝島で生まれ育ち、そのまま島の郵便局に勤めて、41年の歳月。青春時代、結婚、子育てとつづき、その間、郵便局のシステムも大きな変動がありました。

幾度か転機も有りましたが、祝島が大好きで、とうとう離れられませんでした。心残りが無いとは言えませんが、しかし、祝島にいたからこそ、祝島を訪ねて下さった沢山の方達との出会いがあり、祝島の自然を十分に味わい、島に伝わる様々な歴史、文化を知り得たことも、振り返れば、何にも代えられない、良きことであったと自己満足しております。

そして、退職して三ヶ月余。大勢のお方から、今なお、ねぎらいのお言葉を、沢山に頂戴し、頑張った甲斐があったと、感激しています。

さて、これからの第二の人生。

ここらで、もっとゆっくりと、丁寧に歩いてみたいと思っています。

祝島の山野草の写真収集は、積年の念願。

野辺に花開く植物に、スポットを当ててみたくて、写真を少しずつ集めています。祝島の素晴らしさを、再認識し、思いがけない花との出会いに歓声を上げることも、しばしば。いつか集成したいと思ってます。

祝島の自慢のもうひとつは、海の幸。

実は、この際にと、持船を替えました。出漁よりも支度に追われていましたが、そろそろ海の幸にも手が届きそうです。「第二平成」と名付けました。これで、海も山も案内できます。帰島された時には、どうぞ、お気軽に声をかけてください。

と、言うことで、ここらで、のほほん人生とチャレるつもりでしたが、智恵美さん連載のデニスに、祝島の案内をしなければなりませんし、「ガイド養成事業はどうするの」と、國弘事務局長にしかられました。

7月13日に行われました、「祝島の植物観察会」で指導者の山口県植物学会会長さんから、

「祝島銘木百選として、島の自慢をなさったら」とのアドバイスをいただきました。

思えば、草花だけでなく、銘木、祝島ならではの、コッコウ、アコウの木、ケグワ、カンコの木等々、沢山あります。これに取り組む事が、ガイド養成につながりそう。

このメニューについては、次回で。

私ののほほん人生は、しばらくお預けですね。

~ 花*花クイズ ~

と言うことで、次号から橋部さんの植物についての連載コラムが始まる予定です。皆さんお楽しみに。

今回は予告編ということで、皆さんに祝島に咲いている花についてのクイズを出します。右の写真は、皆さんもよくご存じのある植物の花ですが、さて、何の花かわかりますか？

答えは次号で発表します。



Part1. Dennis's first visit to Iwaishima (2)

* デニス是我的の友達です。



(あらすじ)
 祝島にやって来たデニスは、山本のふみちゃんの家泊めてもらうことになりました。今回は山本の藤樹さあと話をする場面です。

前回は6コマで、今回は4コマになりました。まさか次回は2コマ・・・??

活動紹介

山桜の苗木

祝島の「千本桜」を復活させよう！という活動で、祝島中学校の皆さんにご協力いただき、育てている山桜の苗木が、だいぶ大きくなりました。

現在、大きいものは40～50cmになっています。



大きくなってきた山桜の苗木

お知らせ & 募集

『島の細道』紀行文募集中!!

まだまだ応募者が少ないので、皆さんのお知り合いに宣伝をお願いします。

募集内容：祝島の細い道を歩いてみて、感想を紀行文風に書いてください。

応募規定：400字詰原稿用紙5枚以内。

ワープロの使用も可。

応募資格：祝島を訪れた人なら誰でも可

締め切り：2002年12月31日（消印有効）

賞品：祝島の特産品など

応募先：祝島ネット21『島の細道』係

詳しくはホームページ、ポスターで。

<http://www.iwaishima.jp/inet21/hosomichi/>

ベルマーク集め

祝島の学校に寄付するために、ベルマーク集めを実施しています。すでに何名かの方がベルマークを持ってきてくれて、少し貯まってきました。

お盆の帰省のときなどで結構ですので、持って帰っていただけると助かります。郵送の場合は、祝島ネット21事務局「ベルマーク係」まで。

ご協力よろしくをお願いします。



集まってきたベルマークです

編集後記

梅雨が明けたとたん、急に暑くなりましたね。祝島も連日の猛暑です。体調をくずさないように、栄養と睡眠は十分に取るようにしましょう。もうすぐお盆休みなので、祝島に帰省される会員の方も多いと思います。交通事故等に気をつけて帰ってきてください。8月13日には祝島自治会主催の「演歌カラオケ大会」もありますよ！

さて、「いわいしま通信」第2号が完成しました。創刊号もそうでしたが、今回も締め切り直前にバタバタしながらなんとか約束の7月中旬にできあがりしました。記事を担当してくれた皆さん、ご苦労様でした。

これから直前に迫った「第2回祝島不老長寿マラソン」の準備が忙しくなってきます。この大会もたくさんの方々のご協力によって成り立っています。誌面を借りてお礼申し上げます。

次号は10月発行の予定です。お楽しみに。

（編集長：國弘秀人）

事務局では会員の皆さんからの投稿をお待ちしております。ご意見・ご感想など、お気軽に投稿してください。

祝島ネット21の活動費は、会員の皆さんの会費でまかなわれています。この会報を会員の募集活動にもぜひお役立てください。



祝島の夏の風物詩 干シダコ

《発行》 祝島ネット21事務局

〒742-1401 山口県熊毛郡上関町祝島

ホームページ <http://www.iwaishima.jp/inet21/>